

[研究論文]

コロナで顕わになった日本の「自粛」と「同調圧力」

大阪大谷大学 人間社会学部 人間社会学科

教授 服部 慶子

はじめに――

「自粛」という言葉や行動形式は 1980 年代後半、昭和天皇の崩御のときに多用された言葉である。30 年以上前のことだから、記憶は薄れつつあるかもしれない。1989 年 1 月 7 日に天皇危篤の一報がもたらされたとき、NHK を始め、テレビでは特別プログラムが組まれ、通常番組がほとんどなくなってしまった。CM も流されなくなった。マスメディアでは、新聞などもこの報道一色で、例えばバラエティ番組などは、世の中の沈鬱なムードにふさわしくないとして、「自粛」を強いられた。これは葬儀（大喪の礼と呼ばれた）後もしばらく続き、異様な状態が長らく続くことになった。

「自粛」の日本語の意味は、広辞苑によれば「自分で自分の行いをつつしむこと」（英語では *self-restraint* もしくは *voluntary restraint*）であり、本来は自らが望んで自発的に自分の行動を制限して控えることのはずなのであるが、当時は主にマスコミが醸し出す雰囲気個人に強いる私権制限のようなこととなり、「自粛」に従わないものは、時代錯誤だが、戦時中に使われた「非国民」として非難の対象となった。特に国の象徴である天皇の死という事態だっただけに、心底悲しむ人間はもちろん、それほどの思いがない人たちもこれに従わざるを得なかった。

2020 年年明けからのコロナの感染拡大に伴ってこの「自粛」なる言葉が大声で叫ばれる事態が再び起こり、耳目を集めた。当時コロナが短期間で爆発的に世界中に広がったため、感染拡大を防ぐための措置としてフランス、イギリスなどはロックダウンで法的に外出規制した。その一方で、強力な法的強制力を持たない日本は緊急事態宣言を発令して国民に協力を求めた。これはあくまで要請であって違反した場合の罰則はなかった。にもかかわらず、国民は「自粛」して一斉に自発的に外出を控えたのである。その甲斐あってか、当初は世界中から不思議がられるほど感染の拡大が食い止められた。日本ではコロナの封じ込めがいったんは成功したとして、海外で絶賛され、その理由は「ミステリー（謎）」であるとも報じられた。ノンフィクション作家の早坂隆氏は、日本の美点を賞賛する著作『すばらしき国、ニッポン』の冒頭で 2020 年の日本のコロナ対策を「ジャパン・モデル」として紹介し、国民が自粛することによって街から人影が減少したことを「日本人ならでは」と高評価している。¹⁾しかし、コロナの感染抑止には一役買ったものの、「自粛」は諸刃の剣であると考えられる。本稿

では、コロナ感染拡大の最中に声高に叫ばれた「自粛」という言葉に着目し、「自粛」の背景にある「同調圧力」について考察する。

自粛と自粛警察——

「自粛」は日本の国民性と大いに関係しており、お上の言いつけに従順で抵抗しない傾向は江戸時代以来のことだとも言われている。国の規制がきついフランスでは、コロナ感染拡大を防ぐべく 2020 年に発令された外出禁止法に逆らって罰金を支払う人が続出したが、フランス大革命を起こした国民性とも関係があるのかもしれない。また当時「自由の国」アメリカで爆発的に感染者が増えた。さらに、これは国策によるものではあるが、行動に制限をかけず皆が集団免疫を獲得するのを待ったスウェーデンでは死亡者も多かった。

日本でコロナがかなり食い止められた理由の一つとして、「自粛」という名のもとに実はかなりの強制力が働いていることが挙げられる。2020 年のコロナ禍の最中に「自粛警察」という言葉も生まれた。神より法律より「世間」を怖れると言われている日本人にとっては、法律による規制よりも自粛の縛りのほうがきついようである。

「自粛」や「自粛警察」がはびこる現象に反応して、2020 年当初は危惧する意見や警告が寄せられていた。2020 年 5 月に姜尚中氏は「アエラ 25 号」のコラム“eyes”のタイトルを「『自粛警察』はなぜ広がるか コロナ禍が呼び起こすファシズム」と題し、コロナ禍で感じる息苦しさについて、「『自粛警察』という言葉が氾濫するほど他者への監視や正義をふりかざした過剰反応、医療関係者へのプライバシー侵害や排斥など、よどんだ空気が漂っています」と述べ、「他者への干渉が野放図に広がる」理由として、「『上』からかかる圧力を横へ、つまり自分と同じ市民一人ひとりに転嫁しようとするメカニズムが働いている」ため「重大な権限と責任を持つ期間に対する批判を『裏切り行為』とみなし、批判する人々を異質な『余計者』と排斥することは『永遠のファシズム』を呼び出すことになるかも」しれないと危惧した。²⁾ 同誌同号のコラム“eyes”で東浩紀氏は「感染者数の増加は抑えられても懸念すべきは『社会的パニック』だ」として、コロナに関係する国内での差別や嫌がらせが報道されるなか、医療崩壊よりも社会的パニックのほうを懸念している。³⁾ パニックを引き起こす不安な心の状態は姜氏が危惧する「ファシズム」回帰の前兆になりうる。

続いて内田樹氏は「アエラ 26 号」のコラム“eyes”を「大義名分で許されないふるまい コロナ禍で有害無益な『自粛警察』」と題し、戦中派の人が「戦時下に『お国のため』という大義名分の下に人間がどれぐらい残虐になったり非道になったりできる」かを実見したことに触れ、コロナ禍で現れた「自粛警察」が、医療従事者の子どもを通園させるなど言い出したり、県外ナンバーの車を煽ったりすることに対して「他

人を傷つけたり、不快にしたり、屈辱感を与えることのできる大義名分を見つけると、その機会を見逃さない人たちが」がいることを指摘している。⁴⁾

甲南大学の田野大輔教授は2020年6月9日の朝日新聞で、「『自粛警察』まるでファシズム」と題された記事のなかで自粛警察について以下のように分析している。

政府という大きな権威に従うことで、自らも小さな権力者となり、存分に力をふるうことに魅力を感じていたのです。「権威への服従」がもたらす暴力の過激化といえるでしょう。権威の後ろ盾のもと異端者に正義の鉄槌を下すことで、普段なら抑えている攻撃衝動を発散していたわけです。⁵⁾

田野教授は、自粛警察はいじめの構造と同じだとして、「『自警団』的な行動はファシズムの根本的な特徴を体現」していると案じている。

ほぼ同時期に4人の論者が「自粛」の危うさに警鐘を鳴らし、「自粛警察」がファシズムと隣併せであることを指摘していた。続いて2020年6月26日の朝日新聞では、コロナに感染してバッシングを受けた俳優の石田純一氏が、「自粛警察」について「戦時下の密告制度を連想させる」と語っている。事実、緊急事態宣言中に営業を再開した大阪市内の美容室に貼られた紙には「・・・次[営業をしていることを]発見すれば通報します」と書かれていた。このことについて関西大学の池内裕美教授の「自分はやりたいことを我慢しているのに、我慢していないように見える人への嫉妬心が『懲らしめてやろう』という感情を生んだ。・・・ウイルスへの敵意だけが高まり、行きすぎた相互監視の状況が生まれた」というコメントが紹介されている。⁶⁾このような行動に駆り立てる心性について、脳科学者中野信子氏は対談集『生贄探し』において、「人間は自分が正義を行っているときにはどこまでも残虐になれる」とし、西洋で起こった「魔女狩り」を引き合いに出しながら、「集団にとって都合の悪い個体を見つけ出し排除する仕組みが人間には備わっています」と指摘し、⁷⁾これを過激させないために人間の知恵が必要であると説く。さらに中野氏は「新型コロナウイルス以上に、『正義中毒』のパンデミックが起きた、と言ってもいいかもしれません。人々の脳は、社会のルールを破る相手を見つけて制裁を加え、自分があたかも正義の味方になったかのような全能感を覚えて、満足し快楽を感じているように見えました」と述べている。⁸⁾

2020年の5月から6月にかけて、「自粛警察」が戦時中の「大政翼賛会」を想起させるとしてファシズムが再来するのではないかと怖れる危機意識が高かった。しかし、2021年の後半になると「自粛」という言葉を耳にすることが少なくなり、「自粛警察」も鳴りを潜めたように感じられる。これは「自粛」やそこから派生した「自粛警察」が消滅したと考えたいところだが、メディアが特段に取り上げないだけで、実は当たり前前のこと、当然あるものとして国民に受け入れられてしまった結果、あえて言及し

なくなったのではないかという可能性を筆者は危惧する。差別や格差の問題も、そのことが存在すること自体に疑問を抱かなければ誰も議論しないからだ。

自粛と同調圧力—

「自粛」のメカニズムには、これも日本で顕著だと言われている「世間」や「同調圧力」が深く関与している。同調圧力を英訳しようとする、peer pressure になるらしいが、日本語とはニュアンスが異なってしまう。peer pressure には、活躍する周りの同輩に負けぬよう自ら自分にプレッシャーをかけるという、むしろ肯定的な意味が伴うのに対して、「同調圧力」という言葉には、周囲と同じにせよと世間からかかるプレッシャーの意味合いが強い。中野信子氏は著書『人は、なぜ他人を許せないのか』において、日本で集団のルールに逆らうことの難しさに言及したうえで、同調圧力について以下のように説明している。

周囲の行動に合わせなければいけない（逆らうと恐ろしいことが起きるかもしれない）と感じさせる環境要因のことを「同調圧力」と言います。いわば、**集団のなかで少数意見を持つ人に対して、多数派の考えに従うよう暗黙のうちに強制してしまうことです。**⁹⁾

コロナ禍では感染拡大を防ぐことが大義名分として掲げられ、それに逆らうような行動は許容されないどころか、従わない者をバッシングする「自粛警察」がはびこったことは先に見たとおりである。自粛のメカニズムには同調圧力が強く影響している。

動物や魚も然りであるが、人類もまた生存のために集団で群れを作る。人間に近いチンパンジーが協調的な行動をすることはよく知られているが、捕食性のアリの集団ですら組織的に狩りを行うことが観察されている。¹⁰⁾ さらに人間においては、歴史を経て集団を維持するためのルールや掟が発生し、従わない者を異端者として排除する仕組みが成立してきた。それが殊更強いのが日本の社会であると佐藤直樹氏は鴻上尚史氏との対談集『同調圧力』において、東日本大震災の折に、被災者が冷静に行動できたことの原因として「『みんな同じ』ような悲惨な状況に置かれた場合、『みんな同じ』という同調圧力が働く。自分がこうゆう状況でも『しかたない』と考える。『世間のルール』が働く」として、これを「『世間』の関係がもたらす権力」であると論じている。¹¹⁾ 外国では法のルールがなくなり警察が機能しなくなった非常時には暴動や略奪が起りやすいのにもかかわらず、日本は世間からの同調圧力が働いたおかげで被災者の冷静さが海外から絶賛された。この時のように同調圧力は時として良い方向に働くこともあると評価する一方で、佐藤氏は続いて以下のように述べている。

「世間のルール」を遵守しないと「世間」から排除されるが故に、日本人はこれをじつに生真面目に守っている。誰に強制されたわけでもないのに、過剰に付度し、自主規制し、「自粛」する。日本の犯罪率が低いのも、ついでにいえ

ば自殺率が高いのも、他国では考えられないほど、「世間」の同調圧力が強い
ためだと思います。¹²⁾

「世間」の同調圧力は人々に周囲と同じ行動を強制する力を持っているが故に、窮屈さを生むのであるが、世間のみんなと歩調を合わせることは脳の省エネにつながっていると作家の森博嗣氏は指摘する。森氏は著書『お金の減らし方』において、現代の日本人の脳は運動不足で肥満になったような状態であると、以下のように説明している。

周囲に流されることは、判断しなくても良い、考えなくても良い、ただみんなについていけば迷子にならない、自分だけ損をすることはないという気楽な状態であり、生き方として省エネなのだ。体力を使わずに済む。頭を使わずに済む。¹³⁾

「出る杭は打たれる」とか、俗に「赤信号。みんなで渡ればこわくない」と言われるように、コロナの感染の恐怖に襲われる以前から、日本人は周囲に合わせること、周囲と違った行動をしないことを良しとしてきた。森氏によると、それは「省エネ」の生き方なのである。

世間が強い同調圧力は森氏が言うように省エネの気楽さを伴うと同時に、佐藤氏が指摘するように個人の生命を奪うことにもつながる。そして緊急時には国民全体を一つの方向に走らせる。ジャーナリストの鳥集徹氏は2021年に出版された『コロナ自粛の大罪』で精神科医の和田秀樹氏との対談のなかで、二度目の緊急事態宣言に突っ走った日本の状況を「集団的浅慮」だと指摘し、次のように述べている。

日本人の国民性の問題点がまた3つあると思うんです。1つ目は、法律に書かれていなくても「守らなくちゃいけない」と思ってしまう、日本人の「かくあるべし思考」というか、同調圧力の強さ。それが感染を抑えている面もあるんだけど、個人的な主張をすることが恐ろしく難しい国になっている。¹⁴⁾

同調して折り合っている生活が楽であることは、先ほど指摘したが、大多数の人が自粛に浸っている時に、「そんなことは法律にも書いていないので、家から出るなどか、買い物は一人でせよ、とか飲食店は閉鎖させるようなことは、絶対的権力である政府が恣意的な判断のもとに私権制限を行う暴挙」である、といったようなことを言うと、上の引用にあるように目立つし、冷ややかな眼差しで見られることになる。そうすると、ほとんどの人が同調された社会にもの申すことが怖くて、別の言い方をすると「人目」が気になってできなくなってしまう。「世間様」というような概念があるのも日本ぐらいだろう。「世間様」は神のように個人の上に君臨し、規範に従わない者には容赦なき制裁を加えるのだ。

皆が皆でバラバラな考え方を持って勝手な行動をし出すと、確かに社会は混乱する。2022年1月では、コロナのオミクロン株が猛威を振るっているが、欧米では、

一日の新たな感染者が10万人の単位、ひどいときは100万人の単位で増え続けている。日本人は皆がマスクを付け、感染症拡大を止める日常生活を徹底しているので、そこまでの惨状は今のところ呈していない。

ただ、その良い面だけを見て、内向きに日本賛美に陥るのは愚かな態度だと思われる。様々な主張があるべきだし、日本のコロナ政策はこの同調圧力と自粛に頼っているわけだが、これは個人を犠牲にする一面があり、自由で民主的な国家が成熟していくことを妨げているという面もあるのだということも自覚しておくべきではないだろうか。

同じ書物で和田医師は「絶対的権力である政府」と述べているが、実はその政府自体も確固たる信念を持って政策を実行しているわけでないことが指摘されている。

僕が菅さんに一番がっかりしたのは、それなりのアドバイザーがいて割と緩い感染対策でやっけていても、GO TO を続けられるという彼なりの勝算があったはずなんです。ところが支持率低下でGO TOをやめて、非常事態宣言に走っちゃった。すぐに世論調査にビビっちゃうんです。マスコミはマスコミで煽るだけ。¹⁵⁾

つまり、日本社会に同調するという特性があるとして自己抑制が行われるのだが、世論調査のような匿名の場は、格好のはけ口となる。SNSしかりだが、匿名だと意外に日本人は言いたい放題で饒舌になり得る。

日本は一応表面的には民主主義国家なので、世論が反対すると、選挙で負ける可能性があったり、責任を取らされたりする、それは怖いというわけだ。この不思議な国民性と、強引さと及び腰が同居する不思議な政府とのバランスで日本社会はなりたっているように思われる。日本に暮らす外国人が日本の文化について「人目」だと答えたことは、日本という国の国民性の特徴をいみじくも一言で言い当てているように思われる。そして佐藤優氏が指摘するように、「危機になると、同調圧力や相互監視メカニズムのような、日本の国民的特質の地金が出てくる」のである。¹⁶⁾ 強い衛生意識からにせよ、同調圧力のせいであるにせよ、日本人のマスク着用率は海外から驚かれるほど高く、そのことがコロナの感染拡大を防ぐ重要な要因であることは確かである。しかし、佐藤氏が危惧するように、現代のコロナ禍に対して権力はより巧妙になっているので、同調圧力を行政が利用しようとしていることには注意を払わなければならない。佐藤氏は日本の行政について以下のように説明している。

「ソーシャル・ディスタンス」という掛け声のもとで、人びとに自発的に隔離行動を取らせ、相互監視を働かせる。このとき行政権力は、労力を割いて一人ひとりを調べる必要はなく、市民が自主的にお互いを監視し合うシステムを統括すればいいわけです。・・・行政府が国民の同調圧力を利用するわけです。¹⁷⁾

「自粛」や「同調圧力」が行政にいいように利用された場合の危険性を認識し、コロナ禍で顕著となった「自粛」や「同調圧力」が戦争中のファシズムや翼賛に逆行す

るのではないかと懸念しているのが佐藤氏だけでないことはこれまでに見てきたとおりである。

多様性のすすめ——

これまでに「自粛」や「同調圧力」の良い一面に触れつつも、主に弊害について言及してきた。それでは「自粛」と「同調圧力」にがんじがらめのこの日本はどの方向を目指せばよいのだろうか。霊長類学者の正高信男氏は「自粛」のかかえる難しさについて以下のように述べている。

地域の凝集性と、他所者への排他性は表裏一体です。凝集度が高いと、他所者にそれだけ排他的になるのです。都市部に住んでいると、他所者に排他的ではありませんから、コロナハラスメントも起こりにくくなるでしょう。その代わりに自粛も緩みがちになります。自粛はしっかりする、だけれども感染者にハラスメントするのは控えるという態度を要求するのは、二兎を同時に追えといっているようなものなのかもしれません。¹⁸⁾

先に引用した池内教授は、相互監視が一時的に人の移動を阻止したことは認めつつ、江戸時代に天然痘が流行した際に、極端に産業活動を自粛した地域はその後飢饉に見舞われ、多くの人が亡くなったことを例に挙げて、自粛の長期化、強化の弊害を危惧していた（朝日新聞、2020年6月26日）。正高氏も池内教授も「自粛」の効用を認めつつも、行きすぎた「自粛」の弊害を指摘し、バランスのとれた「自粛」を実現することの困難さについて言及している。

過度の「自粛」に歯止めをかける方策として、先に引用した森氏が同著作のなかで「人生の目標は『自己満足である』」と述べていることがヒントになると思われる。森氏は自己満足について論じる際に、日本では幼少より以下の引用のように教育されていることを憂えている。

自己満足はいけないことだ、と教えられる。みんなと同じことを強要される。集団行動をとり、群れから離れるな、と子供のうちから言われている。¹⁹⁾

この傾向に対して、森氏は「仲間で一致団結することは、もちろん無駄ではない、大切な方法の一つではある。しかし、それがすべてではないはずだ」と疑問を呈し、「他者に迷惑をかけないことが第一」であると断ったうえで、「自己満足は、人生の目標としても良いほど立派なことだ」と語り、²⁰⁾ 集団のなかに留まることを前提としながらも、自己満足を追求することが個人の幸せにつながるのだと提案している。「同調圧力」に屈して「自粛」している最中であっても、自己満足という感覚も大切なのではないだろうか。

とは言うものの、森氏の言う「自己満足」は他者を切り離れた利己的な満足追求ではなく、集団のなかにあっても自分の幸福を大切にしなさいというメッセージだと筆

者は理解しているのであるが、「自粛警察」が容易にはびこる土壌をもつ横並び社会の日本で「自己満足」を声高に追求すれば、利己的だと批判されて制裁の対象になりかねない。どうやら協調性は教育の賜ではなく、日本人の遺伝子に引き継がれているらしいと中野信子氏は分析している。特攻という歴史をもつ日本人の「“カミカゼ遺伝子”は脳内に現代も息づいている」²¹⁾のようなのだ。

『自粛バカ』というタイトルからして「自粛」に批判的であることが察せられるが、その本の著者である生物学者の池田清彦氏は、親や学校などの周囲が押しつける画一的な「あるべき姿」に従っている人たちは、なるべくみんなと同じ行動をとろうとするとして、以下のような警告を発している。

それは結局、多くの人と同じことをすることが楽だからだ。同じことをしていれば自分の頭で考える必要がなく、誰からもバッシングされることはない。けれども、自己家畜化というのはそうやって自分の頭で考えないことから始まっていく。そして言説も服装も何もかもが画一的になり、マジョリティにつくことを疑いもしなくなるのだ。²²⁾

この池田氏のコメントは、先に引用した森博嗣氏の言う「脳の省エネ化」に重なる。池田氏は解決策として、日本の教育に欠けている「多様性を尊重する」ことの必要性を説き、「世間一般の風潮から外れる者、変わり者を排除するのではなく、認めてやる必要があるのだ」と提言している。²³⁾ 池田氏は、2020年の「政府の外出自粛要請に9割の国民が従ったのは『みんな一緒だから安心』というマジョリティの行動様式そのものなので、つくづく自粛バカだなと思う」²⁴⁾と嘆き、「みんなと一緒」にいれば安全というわけではないので、自分の頭で考えて行動することの重要性を強調している。

周囲の意見に流されず、自分の頭で考えて行動しようとする際に、他民族国家であるイギリスを参考にすることができる。谷本真由美氏は、著書『不寛容社会』において、日本は集団主義文化圏に属し、外国人の割合が低いのに対して、イギリスは個人主義の社会であるうえに外国人の割合が高いロンドンでは人口の3分の1が外国生まれであることに言及し、以下のように述べている。

多様な人種が共存する社会であるため、最初から「お互いが違う人間である」という彼らの個人主義的な考え方により拍車がかかっているのです。・・・例えばイギリスの場合。幼稚園の頃から「自分は〇〇だと思います」と、大勢の前で意見を述べる授業がありますし、試験や宿題は自分の考えを表明する論述式ばかりです。²⁵⁾

相手の気持ちを読み取り共感することを重要視する日本の教育とは真逆ともいえるイギリスの教育から学ぶ点が多いと思われる。(残念ながら、イギリスはコロナに関しては日々増える爆発的な感染拡大を食い止めることができず苦慮しているのだが。)

池田氏も提案するように、これからの日本には自分の頭で考えて意見を述べ、行動することが必要になってくると思われる。そうすることで、コロナ禍に苦しむ現状のなかで、コロナの感染拡大の抑止力ともなっている「自粛」の効用を認めつつも、過剰な「自粛」や「同調圧力」の呪縛からの突破口を見いだすことができるのではないかと考えられる。社会の根底に多様性を尊重する土壌があれば、マジョリティとは違う意見を述べることができるのだ。

- 1 早坂隆『すばらしき国、ニッポン』（文響社、2020年7月）、p13.
- 2 姜尚中「『自粛警察』はなぜ広がるか コロナ禍が呼び起こすファシズム」『アエラ』25号（朝日新聞出版、2020年5月25日）
- 3 東浩紀「感染者数の増加は抑えられても懸念すべきは『社会的パニック』だ」『アエラ』25号（朝日新聞出版、2020年5月25日）
- 4 内田樹「大義名分で許されないふるまい コロナ禍で有害無益な『自粛警察』」『アエラ』26号（朝日新聞出版、2020年6月2日）
- 5 「『自粛警察』まるでファシズム」（朝日新聞、2020年6月9日）
- 6 「コロナハラスメントなぜ」（朝日新聞、2020年6月26日）
- 7 中野信子・ヤマザキマリ『生贄探し』（講談社、2021年4月）、pp24-25.
- 8 中野信子・ヤマザキマリ『生贄探し』,p50.
- 9 中野信子『人は、なぜ他人を許せないのか』（アスコム、2020年1月）、p126.
- 10 マーク・W・モフェット『「群れ」の生物学 上』小野木明恵訳（三松堂、2020年9月）、p.92.
- 11 鴻上尚史・佐藤直樹『同調圧力 日本社会はなぜ息苦しいのか』（講談社、2020年8月）、p64.
- 12 鴻上・佐藤『同調圧力』,pp65-6.
- 13 森博嗣『お金の減らし方』（SBクリエイティブ、2020年）p.227,
- 14 鳥集徹『コロナ自粛の大罪』（宝島社、2021年4月）、p160.
- 15 鳥集徹『コロナ自粛の大罪』, pp.175-6.
- 16 佐藤優『人類の選択「ポストコロナ」を世界史で解く』（NHK出版、2020年8月）、p148.
- 17 佐藤優『人類の選択』,p69.
- 18 正高信男『自粛するサル、しないサル』（幻冬舎、2021年5月）、p92.
- 19 森博嗣『お金の減らし方』 p.241
- 20 森博嗣『お金の減らし方』 p.242
- 21 中野信子『空気を読む脳』（講談社、2020年2月）、p16.
- 22 池田清彦『自粛バカ』（宝島社、2020年8月）、p155.
- 23 池田清彦『自粛バカ』,p152.
- 24 池田清彦『自粛バカ』,p166.
- 25 谷本真由美『不寛容社会』（ワニブックス、2017年4月）、p144.

—その他の主要参考文献

- 岸見一郎『不安の哲学』（祥伝社、2021年6月）
佐藤優『この不寛容の時代に』（新潮社、2020年5月）
中野信子『ヒトは「いじめ」をやめられない』（小学館、2017年10月）
マーク・W・モフェット『「群れ」の生物学 下』小野木明恵訳（三松堂、2020年9月）